みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Colonial Days and the Present : Melanesian Pidgin and Colonialism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊田, 由貴夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003510

第４章　植民地時代と現在

メラネシア・ピジンと植民地主義

豊　田　由貴夫*

はじめに
Ⅰ　メラネシア・ピジンの発生と普及
Ⅱ　メラネシア・ピジンと植民地主義
Ⅲ　メラネシア・ピジンと反植民地主義
Ⅳ　メラネシア・ピジンと住民のアイデンティティ
おわりに

はじめに

比較的近年になって独立した国家が多い太平洋地域では，国家というものが住民にとっていかに意識されるかは，数多くの問題を含んでいる。特別な民族運動を行って独立を勝ち取ったわけではない国々が多く，民族運動によって国家のアイデンティティが形成されるということは起こらなかった。住民は独立を求めて何らかの運動を行ったわけではなく，多くの国々にとって独立とは，宗主国が植民地を手放さなければならない状況になったという事情により達成されたものであり，いわば「外から与えられた」ものであった。必然的に国家に対する意識は弱く，特に言語集団の数が多いメラネシアでは，多くの住民にとって国家とは漠然としか認識されないものであった。ヨーロッパ社会との接触以前，多くの太平洋地域の社会では，「我々」という意識を持てるのは，人口が数百人か数千人である同じ言語集団か，あるいは同じ言語集団内でも，やはり人口がせいぜい数千人である特定の地域集団などであった。その集団を越える世界は，しばしば「敵」の集団がいる世界であり，あるいは祖先が住むとされる世界であったり，あるいはまったくの未知の世界であった。

そのような状況に対して国家というのは，ヨーロッパ人の到来とともに，まず植民

* 立教大学文学部

Key Words: colonialism, Melanesia, Melanesian Pidgin, national identity, Papua New Guinea
キーワード：国家アイデンティティ，植民地主義，パプアニューギニア，メラネシア，メラネシア・ピジン

地における宗主国の政府として現れた。圧倒的な富と力を持つヨーロッパ人たちが「政府」として，キリスト教とともに現れたのである。そしてそれ以来続いた植民地政府の統治を経て，独自の国家としてヨーロッパ人から独立した後も，その後の独立国家のあり方は，植民地時代の影響を受け続けるのである。

このような状況で，国家としてのアイデンティティあるいはその地域の住民のアイデンティティを強調しようとする動きが現れる。それを意図的に行うのは，しばしば独立国家の政府であったり，あるいはナショナリストとでも呼ぶべき人たちであり，現地の知的エリートたちである。その際にアイデンティティの拠り所あるいは象徴として，しばしば過去からの「伝統」なるものが使われるのは，ある程度当然の成り行きである。植民地政府あるいは宗主国に対立する性質のものとしては，「伝統」は，まず提示されるべきものである。そしてその「伝統」は単なる特定の要素——それは特定の儀礼であったり，習慣であったり，衣装であったりする——の集まりから，徐々に一つのまとまった概念となる。メラネシアで言えば「カストム（kastom)」であり，ニュージーランドで言えば「マオリタンガ（Maoritanga)」であり，サモアならば「ファア・サモア（fa'aSamoa)」である。

この際に「伝統」とされる事象については，多くの議論が重ねられてきた。「伝統」はしばしば「真正な」ものではなく，それは現在の様々な脈絡のもとに創造されたものであるというのは，近年，一般的になりつつある主張である（Hobsbawm & Ranger 1983)。この主張に沿って，従来「伝統」とされてきたものが，実はその地域の住民または地域内の複数の民族によって共有されたものでは必ずしもなく，特定の地域・特定の民族のものが，より広い地域において共有されているという「擬制」のもとに作られる，という例が数多く報告されてきた（Keesing 1989; Hanson 1989)。あるいは「真正な」伝統とされるものが，意識されてか意識されずかはともかく，実は西洋からの要素が多く入ったものであるとの主張もある（Linnekin 1983; Lindstrom 1982)。また，文化あるいは伝統とはそもそも絶えず作られ，発明されるものであり（Wagner 1975)，ヨーロッパ文化との接触による変化もまたその文化の発明の過程の一つであり，「真正な」文化というものが果たして存在するのか，という議論もある。

本論では，メラネシア地域において現在共通語として広く使われているメラネシアピジン（Melanesian Pidgin）が，植民地主義的な性格と同時に，反植民地主義的な性格を持っていることを示す。そしてその反植民地主義的な性格の故に，現在ではそれが人々のアイデンティティの拠り所になっていることを示す。それはしばしば，

反西洋（あるいは反近代）のアイデンティティであり，国家としてのアイデンティティの性格を持つ場合もある。

「真正なる」伝統の性格を持つとされる要素がその地域のアイデンティティの象徴として使われることはごく当然であるが，メラネシア・ピジンの場合は真正な伝統でない性格を持ちながら，それにもかかわらず現在では多くの人々のアイデンティティの象徴となっているという点で，注目すべきである。それはメラネシア地域に伝統的に存在していたものではなく，また西洋的なものを取り入れたわけでもなく，現地社会と西洋との接触により初めて生まれたものである[1]。

植民地主義の問題を扱う際に，メラネシア・ピジンはいくつかの点で意味があると考えられる。第一に，メラネシア・ピジンは，まさに西洋と現地社会との接触の過程において，植民地主義的な状況のもとに発生したという点である。現地社会が西洋社会とコミュニケーションをとろうとした際に，あるいはヨーロッパ人が現地社会とコミュニケーションをとろうとしたまさにその過程によって発生した言語であるという点である。第二に，メラネシア・ピジンは，その発生から普及まで，いくらかの制約があるとはいえ，その過程をほぼたどれる，数少ない言語の一つである，という点である。発生したのが19世紀であり，今日，共通語として普及した時点まで，その経緯がある程度文献によって記録されており，またそれを使用している人たち，あるいは使用していた人たちの発言が記録されている。そしてその際に具体的な植民地政策や国家の政策との関連が直接的に扱えるという点で，言語の普及の過程と植民地主義との問題を扱う際の，一つの適切な事例として考えられる。

メラネシア・ピジンについてはいくつかの呼称が使われているが[2]，最近もっとも使われるのは，トク・ピシン（Tok Pisin）という表現である。これは，メラネシア・ピジンでこの言語自体のことを呼ぶ表現であるため，名称にまつわる様々な語感を排除でき，ニュートラルな性格を持つということでよく使用される。ただし本論では，トク・ピシンという名称がまだ一般的でない状況を踏まえて，以下メラネシア・ピジンという語を原則として使用する。

また，ピジンという語には二つの用法がある。一つは，特定の言語の名称としてではない言語学上の概念としての用法であり，もう一つは個別の言語に対する名称としてピジンという語が使われる場合である。以下，本論では特に断ることのない場合，メラネシア地域で話される特定の言語名としてはメラネシア・ピジンという語を使用し，言語学上のカテゴリーとしての意味に使用する場合は，単に「ピジン」と表現することにする[3]。

メラネシア・ピジンが使用されている国は，パプアニューギニア，ソロモン諸島，ヴァヌアツの3カ国であり，使用されている状況はそれぞれの国で微妙に違うが，以下，主としてパプアニューギニアを対象として考察を進める。

I　メラネシア・ピジンの発生と普及

メラネシア・ピジンの発生は19世紀にさかのぼる。19世紀の初期から白檀やナマコを求めて南太平洋に多くのヨーロッパ人が進出したが，この時の現地住民との交渉の際に，交易用の言語が使われたという記述が見られる。これはヨーロッパ人とメラネシア地域の現地住民との接触により出現した言語であるとされており，これらの言語に対して，Sandalwood English, Beach-la-Mar, Jargon English, South Seas Jargon, South Seas English などの名称が使用されている（Baker & Mühlhausler 1990; Shineberg 1967)。具体的にどのようなものであったかは正確な記録はなく，またこれらのものがすべて同一のものであったかという疑問もあるが，おそらくこれらがメラネシア・ピジンの原型であっただろうと言われている（Baker & Mühlhausler 1990)。さらに20世紀初期に既に共通語として記録されている例を見ると，現在のメラネシア・ピジンの原型がすでにできているのがわかり，さらにその中のいくつかの語彙は，19世紀初期までにさかのぼれることがわかる（Churchill 1911)。

この後は太平洋地域のプランテーションがメラネシア・ピジンの発達の場となる。オーストラリアのクイーンズランドや，ハワイ，サモア，フィジー，ニュー・ブリテンなど太平洋のいくつかの地域に，砂糖やココナツ・オイルやコプラのプランテーションが作られるが，その労働者が太平洋の様々な地域から集められた。メラネシアからも多くの労働者が契約労働者として集められ，現地住民が一定の期間，プランテーションで働く，という現象が生じたが，この際にプランテーションの雇用者であるヨーロッパ人と，被雇用者である太平洋地域の先住民（多くはメラネシア人）との間の会話からメラネシア・ピジンが発達した，と言われている[4]。それぞれのプランテーションの所有者は同じ島から労働者を確保したことから，同じ島民がいくつかのプランテーションで働くという経験をするようになっていった。このため，プランテーションの間にはある程度共通の文化が生じるようになり，一時的に話されていたメラネシア・ピジンも共通性を持つようになり，普及していったと考えられる。そして契約期間を終えた労働者が自分の故郷に帰ってそれを広めることにより，メラネシア・ピジンがメラネシアの各地域に普及した，ということになる。

この普及の詳しい経緯に関しては議論がある。メラネシア・ピジンの発生の原型になったのは，南太平洋地域のプランテーションに共通に存在した文化（メラネシア・プランテーション文化）であるという説（Keesing 1988）と，プランテーションの中の，特にサモアのプランテーションがその基礎となったという説がある（Mühlhausler 1978）。いずれにしても，その発達の過程を詳細にたどるのは現在では難しく，またその発達の過程が単一の経路をたどったわけではないということは明らかになりつつある。そしてその発達に関しては，南太平洋のプランテーションにおける雇用者であるヨーロッパ人と被雇用者である先住民との会話が重要な役割をはたしたのは確かである。

特にメラネシア地域では，もともと言語間の多様性が大きかったため，プランテーションから戻った住民が，他の地域との共通語としてメラネシア・ピジンに利便性を感じたのは不思議ではない。この点も共通語としてメラネシア・ピジンが普及した一因であると考えられる[5]。

メラネシア・ピジンは，まず島嶼部や海岸部で使われるようになり，それからニューギニア島の内陸部へと普及していった。ドイツ人ミッションが1880年代にニューギニア本島に着いた時，そこではメラネシア・ピジンはまだ知られていなかったという（Mühlhausler 1979）。ニューギニア高地には，1950年代から1960年代にかけてメラネシア・ピジンが急速に広まっていく例が報告されている（Salisbury 1972: 56）。

メラネシア・ピジン普及に際して重要な役割を果たしたのが，キリスト教のミッションである。太平洋地域に多くの島が「発見」されてから，キリスト教は「高貴なる野蛮人」を求め，また新たなる布教の地を求めて，太平洋に進出を始めた。1795年にロンドン宣教師協会（London Missionary Society, LMS）が創設され，タヒチで活動を始めた。1817年にはメソジスト宣教師協会（Wesleyan Methodist Missionary Society）も創設され，ニュージーランドで布教活動を始めた。

メラネシア地域には19世紀中頃からミッションが活動を始めるようになったが，布教活動のためにどの言語を使用するかというのは，ミッションにとって大きな問題であった。初期の方針は宗派によって異なる。ニューギニアの北岸，アレクシスハーフェン（Alexishafen）に布教の拠点を置いたカトリックは，1892年の段階で，布教のために現地語を使用することを決めたが，後に1920年代になって，共通語としてのメラネシア・ピジンの有効性を認め始めた（Mihalic 1977）。最終的には現地語での普及を諦め，1931年にメラネシア・ピジンを布教のための正規な言語として決定した。ルター派は，やはりニューギニアの北岸のフィンシュハーフェン（Finschhafen）に拠

点を置き，初期には Kate や Yabem, Graged などの現地語での布教を試みた。しかしニューギニア高地へ進出するにつれ，海岸部の言語を布教の言語として使用することには困難を感じ始めた。最終的には1956年に布教のための言語としてメラネシア・ピジンを公式採用することになった（Hage 1986: 413）。他の宗派の多くは各地の公用語を使用していたが，住民がメラネシア・ピジンを好むことから，徐々にメラネシア・ピジンを使用するようになったと考えられる。最終的には，キリスト教の普及はメラネシア・ピジンで行われるのが一般的になった。礼拝もメラネシア・ピジンで行われ，賛美歌もメラネシア・ピジンで歌われる，というようになる。

そして，さらにこの後のメラネシア・ピジンの普及に大きな影響を与えたのが，聖書のメラネシア・ピジン版の発行である。キリスト教の布教のための言語としてメラネシア・ピジンが使われるようになった後，1966年にメラネシア・ピジン表記の聖書である *Nupela Testamen*（New Testament）が発行された。この聖書の正書法は，メラネシア・ピジンの正書法に関するそれまでの議論をもとにしている。1955年に Hall がメラネシア・ピジンについて正書法を作り（Hall 1955），そして1957年に Mihalic がこのシステムを少し変えて文法書と辞書を作った（Mihalic 1957）。*Nupela Testamen* はこれらの議論をもとにしており，発行後はこの記述がその後のメラネシア・ピジンの書法に大きな影響を与えることになる。1969年にはメラネシア・ピジンに関する正書法委員会が作られ，*Nupela Testamen* の書法が公的なものと認められた（Mihalic 1971: xvi）。以後，その正書法はカトリック教会の出版物を手がける Kristen Press の出版物や，メラネシア・ピジンによる新聞である *Wantok* に採用されるようになり，事実上の標準となった。

二言語の接触によって発生するピジンは，一般的に地方差が大きく標準化の方向性がないために普及が限られるという特徴がある（Stewart 1962）。メラネシア・ピジンの場合も，この *Nupela Testamen* が発行される以前は地方差が大きく，書法は確立していなかった。しかし，これ以降，表記法が確立することになり，メラネシア・ピジンは広く普及することになる。*Nupela Testamen* は初版4万部で，現在までに45万部発行されている。パプアニューギニアの人口が現在約400万人であることを考え，また直接この聖書を読むことがなくとも，教会における毎回の礼拝でこの聖書が読まれている状況を考えると，この聖書の発行はその後のメラネシア・ピジンの普及にきわめて大きな影響を与えたと考えられる。

一方で植民地政府は，当然のことながら自国の言語を使用することを推進してきた。第一次世界大戦前は，ニューギニア島の西半分はオランダが統治し，東半分の北海岸

部と島嶼部をドイツが，南海岸部をオーストラリアが統治していた。この段階では，ドイツ領はドイツ語を，オーストラリア領は英語を普及させようとするが，実際にはほとんど効果はなかったとされる。ドイツ領ニューギニアでは，メラネシア・ピジンを駆除しようとする試みさえ行われたが，第一次世界大戦の終了とともにこの試みも終了した。第一次世界大戦後，オーストラリアはニューギニア地域の共通語として英語の導入を企てるが，ミッションの一部から反対があった。この頃までに既にメラネシア・ピジンは教会で使用される主要な言語となっていたのである。

植民地期の初期の段階では，教育に関するプログラムはほとんどキリスト教のミッションに任されていたこともあり，実際に宗主国（パプアニューギニアの場合はオーストラリア）の政府が教育に関わるようになるのは，第二次世界大戦後である。1940年代後半から1950年代にかけて，オーストラリア政府は共通語として英語を積極的に導入しようとし，メラネシア・ピジンを教育の場から追放しようとした。政府の補助は英語を基礎にした学校にのみ行う，という政策を打ち出し，そして各学校で週に一回，30分の英語放送を行うようになった（Romaine 1992: 83）。しかし，ミッションは学校教育では相変わらずメラネシア・ピジンを重視し，学校教育以外の場でもメラネシア・ピジンは消えることはなく，ますます普及していった。オーストラリアはニューギニア地域に関して1969年に新しい教育政策を示し，この中でもメラネシア・ピジンに代わって英語使用を推進する政策が示される。これにより，学校では英語を使うことが正式に決まった。ただし，初等教育や地方の言語状況によっては例外が認められていたので，実際には，メラネシア・ピジンの重要性はほとんど変わらなかった（Romaine 1992: 74–83）。

現在，メラネシア・ピジンが共通語として使われているのは，メラネシア地域のパプアニューギニア，ソロモン諸島，ヴァヌアツ共和国の3カ国である。それぞれ人口は約400万人，30万人，13万人で3カ国の合計の人口は約450万人となる。この全員がメラネシア・ピジンを話すというわけではなく，どの程度の住民がメラネシア・ピジンを話せるかというのは正確な統計数字はないが，パプアニューギニアの都市部での言語使用に関しては統計資料がある。これによると，1971年の段階で都市部の住民の85%以上がメラネシア・ピジンを話せるとされており（Romaine 1992: 93），この後もさらにメラネシア・ピジンの使用率は高まっていると考えられる。上記のメラネシア三国のうち，パプアニューギニアでは英語が公用語となっており，メラネシア・ピジンは二つある共通語のうちの一つである。ヴァヌアツでは英語とフランス語とともに三つある公用語の一つとなっている。ソロモン諸島では公用語が英語であり，共通

語がメラネシア・ピジンという位置づけがされている。

現在，メラネシア・ピジンがいかに使用されているかを，パプアニューギニアを例にとって示してみよう。パプアニューギニアでは，現地語（メラネシア・ピジンではトク・プレス *tok ples*）が700以上存在するといわれており（Wurm 1982），それぞれの言語集団内ではこれらの現地語が使用される。ただし，この現地語の通じる集団（ワントーク wantok と呼ばれる）を超える範囲で複数の言語集団の成員が関わる状況になると，現地語以外の共通語が必要になる[6]。現在ではこの共通語として英語，メラネシア・ピジン，ヒリ・モトゥが使われるが，その中ではメラネシア・ピジンの使用率が圧倒的に高い。パプアニューギニアの主要な都市でどの言語が使用されるか，という調査が1980年に行われている（表1）。これにより，公共の場という性格が強いマーケットで使用される言語を見ると，メラネシア・ピジンの優位性は明らかである。ポートモレスビー周辺が伝統的にヒリ・モトゥが利用されていた地域である点を考慮に入れると，パプアニューギニア全体でのメラネシア・ピジンの相対的な重要性はより高くなる[7]。また，現地語が異なる者同士が結婚した場合は，夫婦の会話がメラネシア・ピジンになることが多いので，この結果，その間に生まれた子供はしばしば母語がメラネシア・ピジンになる。この意味では，都会の一部ではメラネシア・ピジンは，言語学上のカテゴリーである「クレオール」化しているといえる。これが地方になるとさらに英語が通じなくなり，このメラネシア・ピジンの共通語としての優位性はより大きくなる。地方に行くと英語を話す者を見つけるのに苦労するのに対して，メラネシア・ピジンが通じる地域は9割以上であるとされる[8]。

また，ラジオ放送でも，全国放送ではニュースが英語と二つの共通語で同じ内容が流されるが，地方のラジオ放送になると，大部分がメラネシア・ピジンで行われる。テレビ放送は原則として英語で行われるが，その一部，特にコマーシャルやインタビューなどの場合はメラネシア・ピジンの割合が高くなる。さらに，パプアニューギニアではワントーク（*Wantok*）というメラネシア・ピジンによる新聞が発行されている。1967年に創刊されており，週刊で，現在では1万部以上発行されている。これ

表1　パプアニューギニアにおける三種の言語の使用状況

	家　庭	マーケット
メラネシア・ピジン	57,754	112,794
英　語	4,098	6,553
ヒリ・モトゥ	14,354	39,406

出所：National Population Census 1980（1982）を加工

は新聞が事実上，都市でしか流通していないことを考えると，かなりの読者数を持っていると考えられる。また，少数ではあるが，メラネシア・ピジンによる文学作品や学術書も著されており，演劇，音楽などの大衆を対象にした活動ではメラネシア・ピジンが使われることが多い[9]。したがって，グラス・ルーツ・レベルでのコミュニケーションでは，メラネシア・ピジンが非常に高い地位を占めていることがわかる。

Ⅱ　メラネシア・ピジンと植民地主義

メラネシア・ピジンの発生の過程で特徴的なのは，それが植民地主義的状況で発生したという点である。初期の段階では交易を目的に，そしてその後は植民地開拓やキリスト教布教などの目的を持って太平洋地域に進出してきたヨーロッパ人と，それに対応する太平洋地域の先住民とのコミュニケーションのために発生した。具体的には，交易のための言語として発生し，プランテーションでの先住民とヨーロッパ人との間のコミュニケーションによって次第に言語として確立されるようになった。そこには圧倒的な富と権力を持つヨーロッパ人と，それに対応する先住民，あるいはプランテーションの雇用者と被雇用者という立場の差が大きく意識されていた。したがって，それはまず第一に，ヨーロッパ人の命令を伝える言語である，という性格が強かった。

現在話されているメラネシア・ピジンの言語的特徴にも，このような状況が反映されている。例えば人に対する呼称では，現地住民といわゆる「白人」[10] に対しては呼称が異なる。「白人」の男性は *masta*（英語の master に由来すると考えられる）と呼ばれ，現地住民の男性は *man*（英語の man に由来する）と呼ばれる[11]。同様に「白人」の女性は *misis*（Mrs. に由来）なのに対して，現地住民の女性は *meri*（Mary に由来）である[12]。このような区分はプランテーションでの雇用者と被雇用者との立場の差が言語に反映された結果と考えられ，まさに当時の植民地主義的状況を物語っているとしてよいであろう。また，一般的に子供に対する呼称として，*manki*（英語の monkey に由来）という語が使用されるが，ヨーロッパ人が現地の子供を見て monkey と呼んだ表現がそのまま一般的な呼称として使われるようになったと考えるのは不当ではないだろう。

このような状況の背景となる思想は，オーストラリア人の中でパプアニューギニア統治に関わった人物の発言にも顕著に見られる。例えば，当時英連邦の指導的地位にあった Atlee Hunt（head of the Commonwealth dept.）は，宗主国オーストラリアのパプアニューギニアでの役割について以下のように述べている。

「植民地でのオーストラリアの役割は二つある。一つは黒い肌の我々の同胞たちに関わることであり，彼らに文明化の恩恵を与えることである。(中略) もう一つは我々に関わることであり，それは我々が誇るに足る我々の保有物を最も有効に使うことである。」(Nelson 1972: 229)

つまり，現地住民に対して宗主国は，文明を施すのが目的であり，しかもオーストラリアという宗主国の持ち物である植民地は有効に使わなければならないとする思想が，当時の統治責任者にはあったのである。

このように，ヨーロッパ人にとってメラネシア・ピジンは，命令を伝えるための言語であるという意味を持っていたが，現地住民にとってみると，メラネシア・ピジンはこれと別の性格を持つ。それは，ヨーロッパ人の富にアクセスするための手段という性格であり，これはメラネシア・ピジンの持つもう一つの植民地主義的な性格を示していると言える。

まず現地住民にとってメラネシア・ピジンの能力を持つことは，現地社会で有利な立場を得られる可能性を大きくした。ヨーロッパ人と現地住民とのコミュニケーションの手段としてメラネシア・ピジンが発達していくことにより，コミュニケーションのとれる現地住民がヨーロッパ人から優遇されるようになっていく。メラネシア・ピジンを話す者はヨーロッパ人と交渉・接触ができ，そのためヨーロッパ人から珍重され，現地住民の中で社会的地位が上昇するという現象が生じた。ドイツの植民地時代には，植民地政府の命令を伝えるために，特定の現地住民が選ばれて一定の役割を与えられた例が報告されている。村の代表として *luluai* (現地語の一つである Kuanua 語あるいは Tolai 語のリーダーの意味からとられた)が決められ，それをコミュニケーションの点で補佐するものとして *tultul* (やはり Kuanua 語でスポークスマンの意)が決められたが，この *tultul* にはメラネシア・ピジンを話せる者が選択された(Jacobs 1972: 489)。

メラネシア・ピジンを話せる者が現地の共同体社会で地位を上昇させるという現象が生じたのには，メラネシアの共同体社会の伝統的な社会構造が関わってくる。メラネシアでは一般的に社会的地位は世襲で継承されず，社会的地位を上昇させるには個人的な資質が問題となる。この個人的資質を周囲に示すことで周囲への影響力を強め，社会的地位を上昇させるという特徴がある。ヨーロッパ社会との接触以前は，部族間戦争が頻繁に行われていたこともあり，この個人的資質としては，戦闘能力や交渉能

力などが重視されてきたが，ヨーロッパ社会との接触以降は，植民地政府からのこのような「役職」もまた，その共同体の中で，社会的地位を上昇させる一つの手段となり得た。その意味では，現地住民にとってメラネシア・ピジンの能力を持つということは，その共同体の中で社会的地位を上昇させる有力な手段になったのである。

そして，メラネシア・ピジンの持つ，ヨーロッパ人の富へアクセスするための手段であるという性格は，学校というものに対する現地住民の理解の仕方に明確に見られる。植民地期の初期，ミッションによって導入され始めた学校というシステムは，ヨーロッパ人の富へアクセスするための手段と見なされた。学校というシステムが理解できなかった現地住民は，ヨーロッパ人との接触から，次第にそれがヨーロッパ人のようになるための手段であると認識するようになるのである。

学校が設置された時期，学校に対する現地住民の反応が記録されているが，ある学生は次のような発言を残している。

> 「学校が初めて村にできた時，人々はこう考えた。子供を学校に入れれば白人の知識が得られ，我々の死んだ祖先と会うことができ，村に品物を持ってきてくれるのだと[13]。別のある者は，子供が学校を終えて仕事を得れば，富をもたらしてくれると考えた。子供を学校に入れた者は，これで金持ちになれると自慢し，それを聞いた他の者はやはり子供を学校に入れた（Swatridge 1985: 75）。

学校に対する認識の仕方については，オーストラリア人の説明方法も影響がある。現地住民から「白人」のシステムに対して質問がなされた際のオーストラリア人の回答として，次のような記録が残っている。

> 「白人がやってきてたくさんの学校を作り始めた。白人はこう言った。みんな，学校に行かなくてはだめだ。学校に行って教育を受けて，新しいことを知って新しい生活を知るのだ。白人はこうも言った。学校に行けばよい教育を受けられ，何年かすれば，みな白人のようになるのだと。もっとお金が得られ，金持ちになるのだと。だから，みな白人の言うことを信じて，みな学校に行ったのだ（Swatridge 1985: 75）。」

また，現地住民の「学校とは何か」という質問に答えて，当時ニューギニア地域の役人であったオーストラリア人は次のように発言している。

> 「子供を学校に入れれば，お前たちは我々白人と同じようになるのだ。学校で学べば，

たくさんの知識を得て，たくさんのお金を得て，靴も靴下もはくようになる。そうすれば，お前たちは幸せになるのだ（Weeks 1977: 18–19）。」

そして，ここでいう学校での教育とは，メラネシア・ピジンを学習するという性格が強かった。当時の教育は英語ではなく，メラネシア・ピジンで行われた例がほとんどであったからである。

このような説明のために，現地住民の理解も，教育を受ければ（つまりメラネシア・ピジンを習得すれば）「白人」の富が手にはいる，と考える傾向が促進されたと考えられる。現地住民にとってメラネシア・ピジンは，「白人」と同じような生活をするための数少ない手段の一つであり，そしてきわめて有力な手段と認識されたのであった。

また，キリスト教と結びつけられてメラネシア・ピジンが習得されたことも，メラネシア・ピジンに植民地主義的な性格を与えたと考えられる。ヨーロッパ人の富はキリスト教と結びついて理解され，その富を得るためには，ヨーロッパ人の神であるキリストを信じることが必要であるとされた。キリスト教に対する当時の現地住民の理解が次の発言に見られる。

「我々の持っているものはすべて，我々の神が創ったものだ。ヤムイモも，タロイモも，ブタも，割れ目太鼓も。タロイモを育てるにはタロの女神に対して儀礼を行う。あなたたち白人は積み荷を持ってやってきた。我々の欲しいものばかりだ。そこで我々は考えた。「あの積み荷の神は誰で，どこにいるのだろう」と。そして宣教師たちがやってきて，エホバの事を話し始めた。だから，このことはエホバがやっているのだとわかったのだ（Lawrence 1982: 58–59）。」

このような考えは，ヨーロッパ人が物を生産する過程を見ていない現地住民にとっては，ある程度当然のことであった。その結果，現地住民のキリスト教への関心はあくまで経済的なものであった。そしてそのキリスト教の布教がメラネシア・ピジンによって行われたことにより，それはキリスト教の言語と見なされ，「白人」の宗教の言語と見なされるようになったのである。キリスト教を身につければ「白人」と同じようになれると考えられ，またメラネシア・ピジンはキリスト教の言語であり，それは「白人」の言語であると認識されるのも当然であった。

メラネシア・ピジンがヨーロッパ文化の象徴として認識される，という例も報告さ

れている。ニューギニア北岸，セピック川下流地域の G 村では，現地語の価値を住民が認識しているにもかかわらず，使用される言語としてメラネシア・ピジンが徐々に有力になり，現在では現地語がほとんど話されなくなってしまった。G 村では，メラネシア・ピジンは最初にプランテーションへ契約労働者として出かけた者がもたらしたという意味で「男性」に結びついて認識され，またキリスト教の指導がメラネシア・ピジンで行われていたという点から，メラネシア・ピジンはキリスト教の言葉であり，「白人」の言語であると認識されるようになった。さらには，現代世界あるいはヨーロッパ社会に関する知識を立証化するためにメラネシア・ピジンが使われることから，メラネシア・ピジンが「近代化」の象徴と認識されるようになった。そのため，これに対して「女性」，「伝統」などの概念と結びつけられる現地語は，現在ではほとんど話されなくなってしまったという（Kulick 1992a）。

G 村の住民はメラネシア・ピジンで *kamap*（英語の come up に由来）と呼ぶ独自の概念で「発展」をとらえており，その意味は「他の国のやり方，あり方に向かって変化すること」である。そしてこの，他の国のやり方の典型的なものが「キリスト教」なのである。彼らにとって一番よく目にする「白人」はキリスト教の宣教師であり，*kamap* する，すなわち「白人のようになる」ための手段の最も典型的なものは，キリスト教を受容することになるのである。そして「発展」は住民が敬虔なキリスト教徒になることによって，その代償としてやってくると考えている（Kulick 1992b）。

英語と触れる機会の少なかった G 村では，メラネシア・ピジンがヨーロッパ人の言語であると認識されたのであったが，このようにメラネシア・ピジンがキリスト教と結びついて認識されるということもまた，メラネシア・ピジンが「白人」の富へアクセスするための手段と見なされるという植民地主義的な性格を示しているのである。現在，国民の 9 割以上がクリスチャンであり，国家自ら「クリスチャン・カントリー」と称しているパプアニューギニアの状況を考えれば，このようなキリスト教の影響はきわめて大きかったと考えられる。

Ⅲ　メラネシア・ピジンと反植民地主義

以上のように，きわめて植民地主義的な性格を持つメラネシア・ピジンであるが，同時にメラネシア・ピジンは反植民地主義的な性格をも持ち併せている。

それは，英語との対照性による。英語がきわめて植民地主義的な言語であり，その英語と対立する性格を持つために，メラネシア・ピジンに反植民地主義的な性格が付

与されるのである。

これまで示してきたように，メラネシア・ピジンは，ヨーロッパ人の命令を伝える言語であるとか，ヨーロッパ人の富にアクセスするための手段であるなどの植民地主義的性格を持っている。しかしこれらの性格は，メラネシア・ピジンだけでなく英語にも同様に通じる性格である。すなわち，英語はヨーロッパ人の命令を伝えるのに都合がよく，現地住民にとっては，ヨーロッパ人の富にアクセスするためのきわめて適切な手段である。むしろこの点では，英語の方がメラネシア・ピジンよりもはるかに植民地主義的性格を持っている，と言える。メラネシア・ピジンが植民地主義的性格を帯びるのは，英語が登場せず，あくまで現地語と対照される場合であった。

これに対して英語が登場すると，むしろ植民地主義的な性格は英語に付与される。メラネシア地域の現地住民が現地語以外に共通語として選択できるのは，事実上，英語とメラネシア・ピジン（ヒリ・モトゥは，使用される範囲がパプアニューギニアの南岸部と限定される）であるが，共通語としてどちらかを選択する場合，英語がオーストラリア人などのヨーロッパ人の言語と認識されるのに対して，メラネシア・ピジンは「我々の言語」とされるのである。ヨーロッパ系の住民のほとんどがメラネシア・ピジンを話さず英語を使用し，これに対して現地住民はほとんどメラネシア・ピジンを話す。また，メラネシア・ピジンは特に習得の努力なしに「自然に」覚えられていくのに対して，英語は学校教育の中で習得する，という性質が強い[14]。このため，英語は「学校で」習う「ヨーロッパ人の言語」と認識されるのに対して，メラネシア・ピジンは「自然に」覚える「自分たちの言語」と認識されるのである。この結果，「外国人」と結びつき，西洋あるいは近代と結びつけられる英語に対して，メラネシア・ピジンは反植民地主義的性格を持つようになるのである。

メラネシア・ピジンが英語と対立するのは，それに付与される社会的威信でも示される。現在のメラネシア社会では，英語がもっとも社会的威信が高く，次にメラネシア・ピジン，そして次に現地語，という順になる。メラネシア・ピジンは現地語と比較して西洋・近代あるいは外の世界と結びつけられることによって高い威信を持ち，そしてさらに強く西洋・近代と結びつけられる英語がメラネシア・ピジンよりも高く位置づけられるのである。これは学校教育の中の言語の位置づけでも表現されており，一般的に英語を話すのは「よい」とされ，メラネシア・ピジンを話すのは「悪い」とされる。現地語を話すのはこれらに比べて「最悪」とされるのである（Romaine 1988: 20）。

このきわめて植民地主義的な言語である英語がメラネシアで普及しなかったのは，

議論されるべき点であろう[15]。実際に，植民地期には住民に英語を学ばせようという主張はしばしば見られた。例えばパプア地区がイギリスの植民地であった時期，統治責任者である Hubert Murray (British administrator of Papua) は以下のような発言を残している。

> 「ニューギニアのどんな言語に比べても英語の優越性というのは非常に大きいので，これを現地住民ができるだけ早く習得することが現地住民にとって有利になるのは明白である。(中略) 進んだ国民の言語で置き換えることができれば，それはよいことである。」(Johnson 1979: 3–4)

このような発言の背景には，メラネシア住民に対するヨーロッパ人の圧倒的な文化的優越感が存在している。現地語と英語を比較すれば，英語が優れた言語であるとの認識が，当時の知識人のかなり多くの人たちに共有されていたと考えられる。しかし，この認識があったにもかかわらず，メラネシア・ピジンの普及に対しては歯止めとしては作用しなかった。英語の優秀性に対するこの認識は，だから現地住民には英語を教えるべきだという論理にも結びついたし，逆に，だから現地住民には英語を習得するのは難しすぎるという論理にも結びついたのだった。例えばルター派が布教を行う際に，現地住民に英語を教えるのは無理だと判断したのは，英語は現地住民にはあまりに複雑すぎるという論理によるものであった[16]。

メラネシア・ピジンが反植民地主義的性格を帯びるような状況は，メラネシア地域の現地語と，共通語として使用されているメラネシア・ピジンと英語という，三種の言語を比較すると，より明らかになる。まず，植民地期の初期のように英語が普及していない時代には，現地住民とヨーロッパ人の接触はメラネシア・ピジンを通して行われる。この際，メラネシア・ピジンはあくまで現地語と対照され，現地語が「土着」，「伝統」などの概念と結びつくのに対して，メラネシア・ピジンは「西洋」，「近代」と結びつけられる (図1)。この状況ではメラネシア・ピジンは植民地主義的性格を示す。これは，メラネシア地域が西洋と接触し始めた時期の状況ばかりでなく，前述したセピック川下流の G 村のように，現在でも英語があまり普及していない地域の状況にも対応する。

これに対して英語が多少なりとも普及してきた状況では，英語はヨーロッパ人，西洋，近代と結びつき，きわめて強い植民地主義的な性格を持っているので，これに対するメラネシア・ピジンは，英語との対照性故に反植民地主義的な性格を示すのであ

現地語	メラネシア・ピジン
土　着	(西洋)
伝　統	(近代)
	(植民地主義的)

図1　メラネシアにおける現地語とメラネシア・ピジンの性格

る。英語が登場しない状況では，メラネシア・ピジンが「白人」の言語と認識されるが，英語が登場すると，英語が「白人」の言語と考えられるのである。したがってこの場合には，メラネシア・ピジンは本来「土着」の要素を持っていないにもかかわらず，土着や伝統の概念と結びつけられる可能性を持つのである（図2）。

また，このメラネシア・ピジンの反植民地主義的性格は，それが広く普及しているという「大衆性」によってさらに強められる。ほとんどの現地住民が話すという点から，「我々の言語」であるという意識が強まるのである。

パプアニューギニアの場合，英語が公用語なので，公共という性格が強いテレビ放送は原則として英語で放映される。しかしそのテレビ放送でも，大衆に直接訴えかける必要のある CM ではメラネシア・ピジンが多くなるし，住民との直接的な接触の反映であるインタビューの放映などでは，やはりメラネシア・ピジンが頻繁に使われる。また，前述したように，ラジオの地方局のほとんどがメラネシア・ピジンで放送されている。

同じような傾向は，政治家の活動で使われる言語の場合にも見られる。公の場では英語を使う場合もあるが，民衆に対する演説ではメラネシア・ピジンが圧倒的に多くなる。1982年には候補者のキャンペーンの90パーセントがメラネシア・ピジンで行われたというデータがある（Romaine 1992: 54)。大衆に訴えるには，英語ではなく，メラネシア・ピジンによることが必要なのである。

メラネシア・ピジンがグラス・ルーツ的コミュニケーションの中心になる手段であることから，現地のポップ・ミュージックでは，歌詞としてメラネシア・ピジンが多

現地語	メラネシア・ピジン	英　語
土　着	(土着)	西　洋
伝　統	(伝統)	近　代
	(反植民地主義的)	植民地主義的

図2　メラネシアにおける三種の言語の性格

用されている。自国内の大衆に感覚的に訴えようとするならば，言語としてはメラネシア・ピジンがもっとも適切な手段になる。現在，現地住民によるミュージック・バンドは大部分がメラネシア・ピジンをその表現の手段としている。

以上のように，メラネシア・ピジンは，パプアニューギニアにおいては実質上「国語」といってもよいような強い大衆性を持っている。そしてこの大衆性により「我々の言語」であるという性格が強まり，「団結」の象徴となるのである。そしてこの大衆性から，メラネシア・ピジンはさらに反植民地主義的性格を持つようになる。それは，現地の文化の多様性を克服できるという性格である。

メラネシアでは土着の文化はきわめて多様である。パプアニューギニアでは700以上の言語があると言われ，ヴァヌアツ，ソロモン諸島でも多数の言語数で示されるように，文化は多様である。このため，土着の文化が植民地権力あるいは西洋文明などに対して統一した文化を主張するのはそれほど容易なことではない。しばしば，メラネシアでは反西洋・反近代の象徴として「カストム」という概念が使用されるが[17]，その「カストム」は必ずしも「真正な」文化ではなく，その内容は曖昧で漠然としていることが指摘される（Larcom 1982）。しかしこのカストムは，曖昧であるが故に多様性を克服して「反西洋」の象徴となり，まさにその曖昧さによって土着の文化を統一する力を持ちうるとされる（Lindstrom 1982: 317）。つまり，明確であればあるほど，メラネシアの多様な文化には適合しにくくなり，曖昧なるが故に多様な土着の文化を象徴することができるのである。

メラネシア・ピジンの場合も同様に，一般に広く使用されているという大衆性によって，土着の文化の多様性を克服できる力を持ち，西洋に対して「土着」の概念の象徴ともなりうる。「カストム」という概念自体がメラネシア・ピジンによって表現されていることは，まさにメラネシア・ピジンの持つ，この多様性を克服する性格を象徴的に示している。

Ⅳ　メラネシア・ピジンと住民のアイデンティティ

メラネシア・ピジンが持つ英語との対照性は，現地住民のアイデンティティの問題と重なる。メラネシア・ピジンは現地住民のアイデンティティの拠り所となっており，それは，現地語を話すワントークを越えた範囲のアイデンティティである。しかしこのアイデンティティは，現地住民のすべてに共有されているわけではない。例えば現地のエリートは英語を流暢に使いこなし，メラネシア・ピジンにアイデンティティを

感じる傾向は少ない。もちろん現地のエリートもメラネシア・ピジンを話す。むしろ現地のエリートの場合は，高等教育を受けるために年少の段階から出身地域を離れることが多いために，現地語を話せる場合が少なく，メラネシア・ピジンが母語に近い状況になっている場合が多い。それにもかかわらず現地のエリートは，むしろ英語への親近感を示すことで，自分のエリートとしての地位を確認するという傾向があり，そのためメラネシア・ピジンを軽蔑さえする傾向がある。メラネシア・ピジンは「田舎」の言語であり，「大衆」の言語であるとするわけである[18]。この意味で現地のエリートの意識は，むしろ旧宗主国の政府側などの立場に近いという性質もある。

したがって，メラネシア・ピジンに表現されるアイデンティティは漠然とした「我々」の感覚であるが，この「我々」は状況によって微妙に異なる。英語が西洋，「白人」に結びつけられて考えられるので，それに対するメラネシア・ピジンは反西洋，反「白人」あるいは反近代と認識される傾向がある。したがってメラネシア・ピジンによるアイデンティティは，オーストラリア人を典型とするヨーロッパ人に対して「メラネシア人」というアイデンティティであることもあり，この意味ではパプアニューギニア，ヴァヌアツ，ソロモン諸島というそれぞれの国家を超えたアイデンティティとなる場合もある[19]。

あるいはこのアイデンティティは，メラネシア地域の三国のそれぞれの国家に対するアイデンティティともなりうる。国家に対するナショナル・アイデンティティとして，メラネシア・ピジンを話す人々，という概念が使われるのである。「外から与えられた」形式で独立をはたしたメラネシアの国々（あるいは太平洋地域の国々）では，住民にとって国家の意識はきわめて希薄であり，ナショナル・アイデンティティを確立するのは，現在でもそれぞれの国家の重要な課題である。メラネシア・ピジンはそのナショナル・アイデンティティを確立する際に利用できる数少ない拠り所の一つである。メラネシア・ピジンを話すということにより，英語を話す「外国人」と対立して自分の国家を意識することができるのである。

またメラネシア・ピジンは時には国家のエリートに対して，グラス・ルーツ的な民衆としてのアイデンティティにもなりうる。もともとメラネシア地域では社会的な階層がほとんど存在せず，近代化によっても階層が経済的に大きく分化しているわけでもない。そして富を親族集団内や共同体内で配分するシステムが存在しているので，財が特定の個人に蓄積されることがなく，そのため経済的にも階層が出現しにくい。しかしながらこのように社会的・経済的階層が明確となっていないメラネシア地域においても，現地住民は決して一枚岩ではなく，現地のエリートを含まないようなアイ

デンティティも存在しうるのである。

おわりに

以上のように，メラネシア・ピジンは植民地主義的な状況で発生し，植民地主義的な性格を持ちながら，現在では，現地住民のアイデンティティの拠り所になっている。それは英語というきわめて植民地主義的な言語と対立する性格を持ち，それ故に反植民地主義的な性格を持つからである。「真正な」伝統とされるものが，住民のアイデンティティの象徴となるのは当然であるが，メラネシア・ピジンの場合は，植民地主義的な性格を持ちながら，また「真正」ではない性格を持ちながら，住民のアイデンティティの基礎になっている。近代化の際に住民のアイデンティティの拠り所となる「真正な」伝統とされるものが，実はヨーロッパ的な要素が入り込んでいるものであるとは，しばしば指摘されることであるが，「真正でない」ものもまた，住民のアイデンティティの象徴となりうるのである。

そしてそのメラネシア・ピジンによるアイデンティティとは，英語と対立する性格の故のアイデンティティであり，したがってすべての現地住民に共有されるわけではない。そのアイデンティティは国家を超えた「メラネシア人」の団結を示す場合もあれば，また国家へのアイデンティティである場合もある。あるいは，現地のエリートを含まない，民衆のアイデンティティでもありうる。

また，以上見てきたようにメラネシア・ピジンには植民地主義的な性格と反植民地主義的な性格という相対立する性格が同居しているが，メラネシア・ピジンがこれほどまでに普及したのは，このことが深く関係しているであろう。

メラネシア・ピジンでの話というのはいつも終わるときの言葉が決まっている。英語の That's all. に由来する *tasol* ということばがあるが，これに 3 人称単数の代名詞の em を付けて，「これで終わりです」という表現を必ず文章の最後に付けて終わりにする。本論も，このメラネシア・ピジンの表現で終わりにしよう。エム・タソル (*Em tasol*)。

注

1) ここで西洋またはヨーロッパという時には，オーストラリアをも含んでいる。実際，太平

洋地域では，オーストラリアは西洋またはヨーロッパ地域の代表的な存在であり，特に本論の対象の中心となるパプアニューギニアにとって，オーストラリアは旧宗主国だったこともあり，絶対的な存在である。

2) メラネシア・ピジンは，一般的にピジン（pidgin）とだけ表現される場合が多いが，他に，ピジン英語（Pidgin English）という名称が使われたり，あるいはヴァヌアツではビスラマ（Bislama）という名称が使われる。またアカデミックな議論の場ではメラネシア・ピジンという語やネオ・メラネシアン（Neo Melanesian）という語が使われてきた。

3) ピジンという語の第一の用法は，言語学上の概念としての用法である。これは言語を区分する際のカテゴリーとしての概念であり，「共通語を持たない人々の間に起こる，限定されたコミュニケーションの必要性を満たすために生まれる周辺的な言語」（Tod 1974: 1），あるいは「他の集団とコミュニケーションをとる目的のために特別に作られた言語であり，どの集団においても自分の集団内のコミュニケーションには使用されていない言語」（Hudson 1981: 61）という意味で使われる。これが普及し，語彙が拡大し，さらにこれを母語とするような人々が出現するようになると，「クレオール」と呼ばれる（Tod 1974: 3; Hudson 1981: 66）。以上のような言語学上の概念や言語に対するカテゴリーとしてピジンという用語を使うが，これとは別に個別の言語に対する名称としてピジンという語が使われる場合がある。メラネシア地域で話される共通語に対しても，一般的にピジンという名称が使われる。これはあくまで個別の言語に対する名称であり，上記の言語学上のピジンという概念とは別のものである。

4) このような状況で新しい言語が発生する過程については，いくつかの説が主張されている。その一つに，英語を母語とする者が相手に理解させようとして簡単な英語を使用して話しかけ，それを現地住民が独自の解釈をすることで，英語ではない独自の言語が発達していった，という説がある（Tod 1974: 29–30）

5) ただし，これはあまり強調は出来ない。というのは，メラネシア・ピジンが普及する以前にも，周囲の民族とのコミュニケーションはある程度行われていたからである。通常は，自分の言語以外にも周囲の民族の言語を多少話せたり，あるいは，特定の言語またはその簡略版が一定の地域で共通語として利用されていたりした。例えば，パプアニューギニア南岸で現在でも共通語として使用されているヒリ・モトゥは，現地語の一つであるモトゥ語の簡略版であり，その典型的な例である。またマッシム地域のクラ交易でも，ドブ島民の言語が交易用の言語として使用されていたという報告があるし（Malinowski 1922: 39–40），ニューギニア北海岸など他の地域でも，同じような共通語が利用されていた（Capell 1972: 616）。

6) 「ワントーク」はメラネシア・ピジンで「同じ言語を話す人々」という意味で使われるが，実際にはメラネシア・ピジンや英語などの共通語を話す場合にはワントークという語は使われないで，同じ言語集団出身者という意味で使われる。

7) この統計はパプアニューギニアの主要都市を対象にしたものであり，この統計におけるヒリ・モトゥの使用者はほとんどポートモレスビーの住民である。この統計においてポートモレスビーの住民を除くと，家庭でヒリ・モトゥを使用する人の数は660名，マーケットでヒリ・モトゥを使用する人の数はわずか51名になる。

8) パプアニューギニアの場合，メラネシア・ピジンは公用語ではなくあくまでも共通語という位置づけであり，公的に扱われることは少ない。憲法上ではメラネシア・ピジンについて，わずかに次の点で記述がある。パプアニューギニアで市民権を獲得する場合の条件として，申請者はメラネシア・ピジンかヒリ・モトゥあるいは当国の現地語の一つに関する知識を有することが必要とされる（パプアニューギニア国憲法 Sub-section 68(2)（h））。つまりこれによると，英語を話せるだけでは市民権の獲得の条件としては不十分ということになり，英語以外に二つの共通語のうちの一つか，あるいは現地語の一つに関する知識が必要になるということになる。

9) メラネシア・ピジンによる詩集（Hannet 1970; Tawali 1971）や，戯曲（Hannet 1969）などがあり，文学作品は現地で発行されている雑誌などに掲載される。ただし，最近の例は少ない。また，学術書の例としては，Peter Lawrence の *Road Belong Cargo* のメラネシア・ピジン訳がある（Lorens 1986）。

10) 「白人（メラネシア・ピジンで *waitman*）」は人種的概念というよりは，社会的な概念という性格が強く，必ずしもヨーロッパ人だけでなく，日本人なども含んでいる。

11) このような区別は都市ではなくなりつつあるが，地方では相変わらず使われる区別であり，

「白人」と現地住民の差に対する意識の強さを示している。

12) メラネシア・ピジンの使用法に関しては，Mihalic (1971) を参照。ただし，*misis* という語に関しては，現在では「白人女性」を示す以外に，「妻」という意味にも使われるようになってきている。この用例は特に都市部で使われる表現であり，この際には，「白人女性」と現地女性との区分は特にしない。

13) この，祖先が積み荷（カーゴ）を持ってきてくれるという考えや，ヨーロッパ人だけが積み荷を手に入れる手続きを知っており，その手続きを知りさえすれば積み荷を手に入れられるという考えは，メラネシア地域で頻繁に発生したカーゴ・カルトによく見られるモチーフであり，実際の運動に至らなくとも，このような考えは一般的に広く存在しているとされる (McElhanon 1969: 179)。実際の運動ではなく，このような考えに対して，カーゴイズム (cargoism) という名称が使われることもある。

14) 原則として学校教育の言語は英語となっているが，その学校でも，休み時間や放課後になれば，教師と生徒の間の会話がメラネシア・ピジンになってしまう，というのはよく観察される光景である。

15) やはり太平洋地域でヨーロッパ人と接触したポリネシアでは，「ピジン」が発達することなく，英語が共通語として普及するようになった。

16) ルター派は初期の段階から，布教のための言語として英語を使用することは全く考えていなかった (Hage 1986)。第一次大戦後，英語使用を促進しようとした国際連盟に対してルター派が行った報告には，「未開なパプア人の精神状態と，高度に発達した英語との相違」という記述が見られる (Romaine 1992: 80)。

17) ヴァヌアツではこの「カストム」という概念が頻繁に使用されるようであるが，パプアニューギニアではほとんど使われていない。

18) パプアニューギニアで現地の住民にメラネシア・ピジンで話しかけると，それまでの緊張感が一気にとけて「あなたもピジンを話せるのか」と，すぐに親近感を示す場合が多い。これに対して，現地のエリートにメラネシア・ピジンで話しかけると，英語で答えが返ってくるというのはよく経験することである。メラネシア・ピジンは理解していても（あるいは母語に近い状況でも），英語が通じそうな相手には英語で話そうとする傾向がある。

19) メラネシアという範囲には一般的に，ここで対象にした三国の他にフィジーやニューカレドニアが含まれる。ただし，パプアニューギニア，ソロモン諸島，ヴァヌアツの三国だけが国際的な関係として「メラネシア・スピアヘッド・グループ」を構成しているのは，メラネシア・ピジン語圏と一致している点で，象徴的である。またこの三国の住民が海外で出会い，互いにメラネシア・ピジンが通じることを知ると感激するというのはよく聞く例である。

文　　献

Baker, P. and P. Mühlhausler

1990 From Business to Pidgin. *Journal of Asian Pacific Communication* 1, 87–115.

The Bible Society of Papua New Guinea

1978 *Nupela Testamen bilong Bikpela Jisas Krais, Buk Bilong Ol Sam*. Port Moresby.

Capell, A.

1972 Languages. In P. Ryan (ed.) *Encyclopaedia of Papua and New Guinea* Vol. 2, pp. 610–617. Carlton: Melbourne University Press.

Churchill, W.

1911 *Beach-la-Mar: The jargon or trade speech of the Western Pacific*. (Carnegie Institution Publication 164). Washington DC: Carnegie Institution Publication.

Hage, H. B.

1986 Languages and Schools. In H. Wagner & H. Reiner (eds) *The Lutheran Church in Papua New Guinea: The First Hundred Years 1886–1986*, pp. 409–50. Adelaide: Lutheran Publishing House.

Hall, R. A.

1955 *A Standard Orthography and List of Suggested Spelling for Neomelanesian*. Port Moresby: Department of Education.

Hannet, L.
1969 *Em Rot bilong Kago*. Kovave, pilot number, pp. 47–51.
1970 *Wiliwil*. Port Moresby: Papua Pocket Poets.
Hanson, Allan
1989 The Making of the Maori: Culture Invention and its Logic. *American Anthropologist* 91, 890–902.
Hobsbawm, E. and T. Ranger (eds)
1983 *The Invention of Traditions*. Cambridge: Cambridge University Press.
Hudson, R. A.
1980 *Sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Jacobs, Marjorie
1972 German New Guinea. In P. Ryan (ed.) *Encyclopaedia of Papua and New Guinea* Vol. 1, pp. 485–98. Carlton: Melbourne University Press.
Johnson, R. K.
1979 *Language policy in Papua New Guinea. Teaching Methods and Materials Centre* (Research Report 28). Port Moresby: University of Papua New Guinea.
Keesing, R.
1988 *Melanesian Pidgin and The Oceanic Substrate*, Stanford: Stanford University Press.
1989 Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific. *The Contemporary Pacific* 1, 19–42.
Kulick, D.
1992a *Languages Shift and Cultural Reproduction: Socialization and Self and Syncretism in a Papua New Guinea Village*, Cambridge: Cambridge University Press.
1992b "Coming up" in Gapun: Conceptions of development and their effect on language in a Papua New Guinea village. In G. Dahl and A. Rabo (eds) *Kam-ap or Take-Off: Local notions of development*, pp. 10–34. Stockholm: Stockholm Studies in Social Anthropology.
Larcom, J.
1982 The Invention of Convention. In R. Keesing and R. Tonkinson (eds) *Reinventing Traditional Culture: the Politics of Kastom in Island Melanesia*. (Special Issue of Mankind 13), pp. 330–337.
Lawrence, P.
1982 Madang and beyond. In R. J. May and H. Nelson (eds) *Melanesia beyond Diversity*. Canberra: A.N.U.
Lindstrom, L.
1982 Leftmap Kastom: The Political History of Tradition on Tanna, Vanuatu. In R. Keesing and R. Tonkinson (eds) *Reinventing Traditional Culture: the Politics of Kastom in Island Melanesia* (Special Issue of Mankind 13), pp. 316–329.
Linnekin, J.
1983 Defining tradition: variations on the Hawaiian identity. *American Ethnologist* 12, 241–252.
Lorens, P.
1986 *Rot Bilong Kago*. Port Moresby: Institute of Papua New Guinea Studies.
Malinowski, B.
1922 *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. New York: E.P. Dutton.
McElhanon, K. A.
1969 Current Cargo Beliefs in the Kabwum Sub-District. *Oceania* 39, 174–86.
Mihalic, F.
1957 *Grammar and Dictionary of Neo-Melanesian Pidgin*. Westmead, NSW: The Mission Press.
1971 *The Jacaranda Dictionary and Grammar of Melanesian Pidgin*. Port Moresby: The Jacaranda Press.

1977 Policies and Experiences in the Catholic Mission in the Field of Teaching in Pidgin. In S. A. Wurm (ed.) *New Guinea Area Languages and Languages Study Vol. 3, Language, Culture, Society, and the Modern World* (Pacific Linguistics C-40), 653–59.

Mühlhausler, P.

1978 Samoan Plantation Pidgin English and the Origin of New Guinea Pidgin. In *Papers in Pidgin and Creole Linguistics* 1 (Pacific Linguistics A-24), 67–119.

1979 Growth and Structure of the Lexicon of New Guinea Pidgin. Pacific Linguistics C-52).

National Population Census 1980

1982 *Final Figures: Census Division Populations.* Port Moresby: National Statistical Office.

Nelson, H.

1972 *Papua New Guinea: Black Unity or Black Chaos?* Harmondsworth: Penguin.

Office of Legislative Counsel

1982 *Papua New Guinea Constitution.* Port Moresby.

Osmers, D.

1981 Language and the Lutheran Church on the Papua New Guinea Mainland: An Overview and Evaluation. In *Papers in New Guinea Linguistics* (Pacific Linguistics Series A-61), 71–164.

Romaine, S.

1992 *Language, Education, and Development: Urban and Rural Tok Pisin in Papua New Guinea*, Oxford: Clarendon Press.

Salisbury, R. F.

1972 Notes on Bilingualism and Linguistic Change in New Guinea. In J. B. Pride and J. Holmes (eds) *Sociolinguistics*, pp. 52–64. Harmondsworth: Penguin.

Shineberg, D.

1967 *They Came for Sandalwood: a study of the sandalwood trade in the south-west Pacific 1830–1865.* Melbourne: Melbourne University Press.

Stewart, W. A.

1962 The Functional Distribution of Creole and French in Haiti. *Georgetown Monograph Series on Languages and Linguistics* 15, 149–59. Washington, DC.: Georgetown University Press.

Swatridge, C.

1985 *Delivering the Goods: Education as Cargo in Papua New Guinea.* Manchester: Manchester University Press.

Tawali, K.

1971 *Nansel.* Port Moresby: Papua Pocket Poets.

Tod, L.

1974 *Pidgins and Creoles.* London: Routledge & Kegan Paul.

Wagner, R.

1975 *The invention of culture.* New Jersey: Prentice-Hall.

Weeks, S. G.

1977 *The Story of my Schooling: Autobiographies of Schooling in Papua New Guinea.* Port Moresby: Education Research Unit, University of Papua New Guinea.

Wurm, S. A.

1982 *Papuan languages of Oceania.* Tübingen: Narr.